

^ 13
3205
1



天孝子善之丞者 戊戌 生世 難寺 戊戌 聞法 得道 故

へ13

3205

1-2

門へ13
3205
1

昭和九年
十月九日
購求

孝子善之丞感得傳卷上

奥州伊達郡南半田村田所といふ所は松平子爵の屋といふ

所あり。其はともも口をわたり車不問を以て天性

孝行乃あり。心を直してかりにいつたり。其は

順なり。人といひしをたし。其父を尊ぶといふ。孝子あり。

然るに孝は正當小父母の爲小才命といふ。其は孝養といふ。

言終れ及ばざる。活たり。曾く十二宗本の付通なり。研

屋をたす。其は孝あり。或時孝は初宅に。酒狂なり。

及び。人た書。其は孝あり。其は孝あり。其は孝あり。

幼少あり。其は孝あり。其は孝あり。其は孝あり。

弘海齋族附

亮融

孝子善之丞



止りんとす。若し至之と示して平を貞し。是れ終もひかまは
 刀をのぎこころんとを付居る不し。若し至母外よりかけ
 つぎ二人して漸刀柄らばいとり静れくる。至母に深き
 ありといはれ。数日療治して漸く平愈せり。其疵の痕之
 不令しお跡まり。又古四命生得邪見にふりし。其
 をと奇社へあり。説法の聲へもつらふ。やあれはのこ
 れく呵して止させ。常に三室を徘徊せり。其現得る。正
 徳四年三月の比より。痲病をぬい出。其秋の比より。人前
 乃まもつへむ。ひしす。病床より打外に移。醫國療ま
 其強もる。秋すもく。足ぶく。を悪臭ま。し。仍く

親類其外は若もろともみ果く出入の若るし。高命元より
 貧き若る。ふかく形病ぬ。又朝々此煙し。終に如
 ぬ。其翌年の暮年。貧不足に。地頭もま。ま。其
 及らる。若し至其年。高命なり。母と公証合也。至ハ山小堂で
 新をこり。夜ハ母と共。粉をま。り。つ。い。終夜儀を備儀るし。
 毎夜名の。つ。ま。で。働。き。翌朝。素折の陣。金。を。あ。い。納。む。其
 孝に。流。れ。り。村。中。れ。者。も。今。に。感。を。ま。し。也。爰。に。或。醫。師。の。云。痲。病
 する。藥。種。に。白。蛇。と。よ。め。あり。洞。十。年。る。る。べ。く。此。病。療。治。を。せ。し
 吾。と。至。悦。則。仙。其。高。命。所。に。あり。世。道。五。里。あり。藥。店。あり。白。蛇。の。事。を
 いふ。に。か。り。其。ま。ご。り。り。あ。れ。ば。人。と。一。句。同。け。せ。せ。あ。ら。は。若。れ

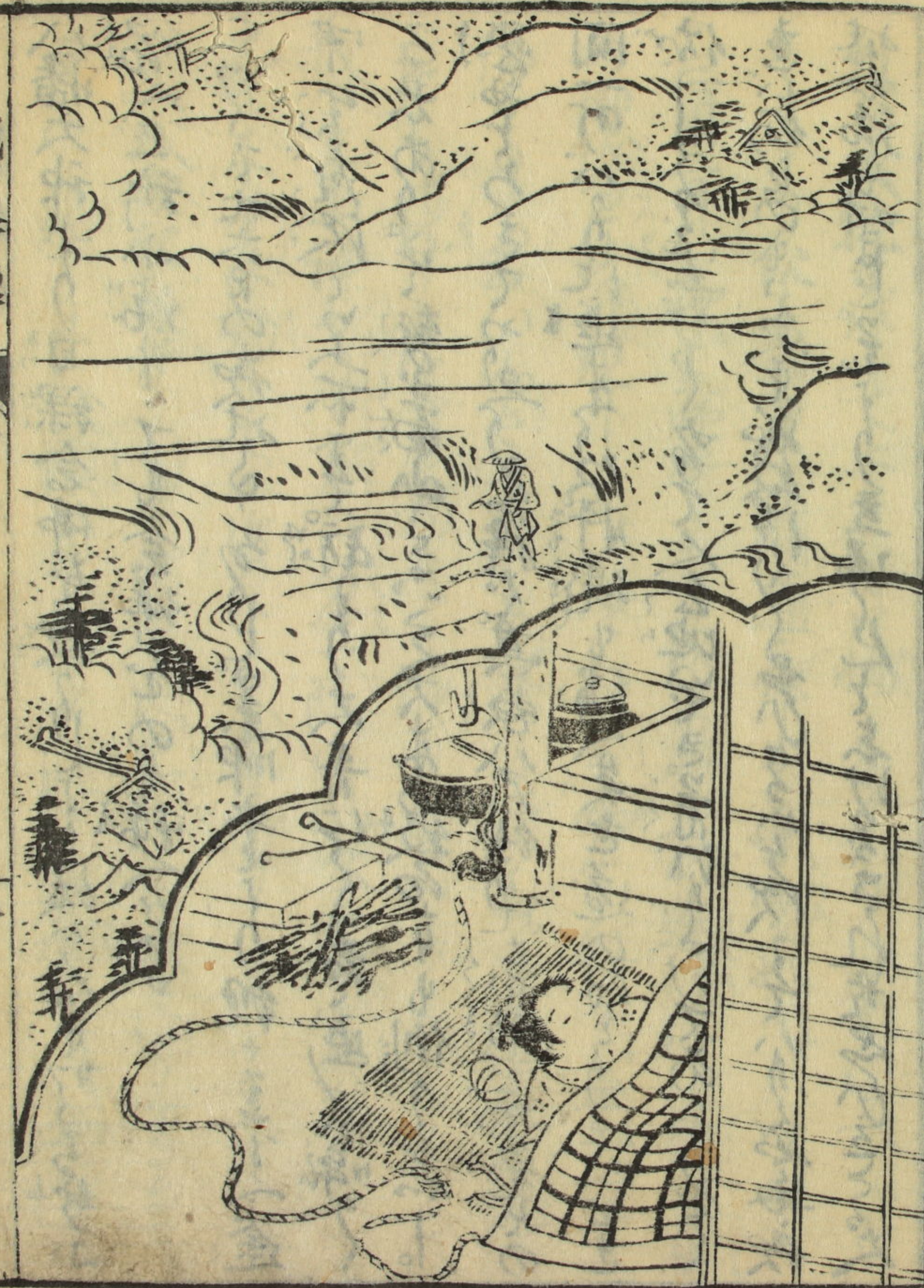




其冥途を驚りいませ。年月をひきわくも驚りなく清く一
 こし又叶ひて死に依り我命に之歸して父を快然とせり
 又一心に祈念し毎夜此時より社の縁に臨み
 南を八幡大菩薩と唱へて帰る。晝は他日後世のいふか
 へし。父母のかくもあせむ。毎夜深更と思ひ出く臨み
 七日小あつら寅の時ぐり。冥途へいづく尤も。永年二十斗か
 らん。とせ。婦人公家一人冠帯光り。向き走。坐向き禱をせり。ち
 矢を持向馬にせり。多々恥まほいて。親る。い声と。汝父
 へ為く赤に祈り志清く。い然れども悪業不感の病をれ。快渡
 せん事か。つる。と。是より南小あつら。て。東折の某陳如未

又新勝寺村の親世音。毎夜臨み。丹後を抽で祈る。必
 感應あり。まき。ぬ。汝九月十日に生せり。汝が前生は同所
 山にあり。た。る。い。急仏法書をやり。善縁より。今人間
 の生を交り。されども急務の法人を孔る。或僧の法
 衣を喰破り。これ報して。飛人。二。人。と。せ。多。く。い。れ。れ。も。法。縁
 に福を成す。吃し。は。る。れ。る。と。今。汝。と。急。仏。立。る。返。を。授。く。一。生
 至。誠。の。心。と。ある。は。不。言。も。汝。才。に。事。り。来。世。も。た。大。く。た。ま。か。り。し
 る。と。い。ふ。法。と。教。は。し。て。我。は。是。八。幡。大。菩。薩。を。い。ふ。事。を
 思ふ。忽大凡次来り。世方害く。汝く。世。婆。八。清。結。ひ。ぬ。行。を。く
 夜も明ぬ。れ。が。家。に。帰。く。母。と。い。つ。が。生。日。を。同。く。神。の。出。告。ふ。事。

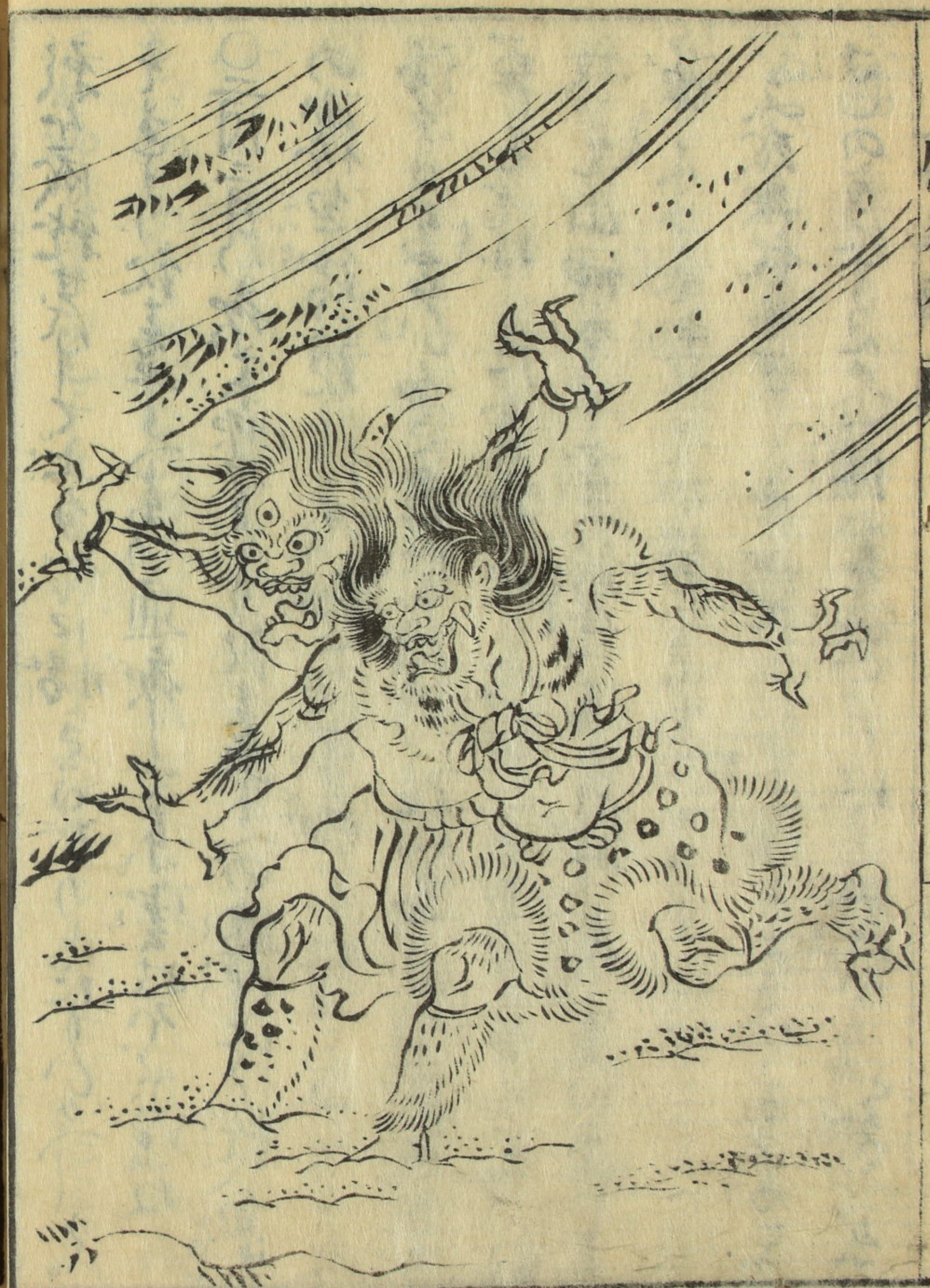
多ぶらび。九月十日午の時ありとぞ。先づ魚トシム計トシム示トシム取トシムを告トシムりし。
 信公トシムすめり。肝トシムと銘トシムし。又トシム病トシム收トシム復トシムすりし。毎トシム夜トシム三トシム示トシムに糸
 福トシム也トシムんと。心中トシム不トシム拍トシム云トシム物トシム也。宅より八帖文一十帖余夫より一末師まへ一丁
丈より一尺まへ七帖余ありを三三三を人
ふとハおすあき謝ありといし示取をゆし後ハ三所多倫のり母をりにか
そふふふとせつらとふん
 相トシム十七日トシムより毎トシム夜トシム丑トシムの時トシムにおく。之トシム亦トシム一トシム浴トシムるトシムり。多トシムく洗トシムはれ
 丸トシム毎トシム夜トシムのトシムるトシムりといひ。後トシム日トシム後トシム世トシムたトシムんトシムやトシムきトシムこトシムつトシムれトシムてトシム外トシムらトシムる
 由トシム糸トシム浴トシムの時トシム刻トシムをトシムれトシムぬトシムるトシムり。間トシム立トシムたり。仍トシムてトシム火トシム繩トシム火トシムを
 付トシムきトシム。其トシム時トシムよりトシム夜トシム来トシムるトシムるトシムをトシムれトシム分トシム限トシムをトシム積トシム立トシム火トシム繩トシムをトシム指トシム
 の間トシムはトシムゆトシムしトシムてトシムみトシムくトシム寢トシムすトシム。火トシム其トシム下トシムまでトシム焼トシムれトシム。にトシムおトシムらトシムきトシム月トシムを
 見トシムしトシム。凡トシム雷トシム作トシムたりトシム。水トシムをトシムあトシムびトシムてトシム洗トシムくトシムるトシム。火繩乃ちたれたれ今に
あり

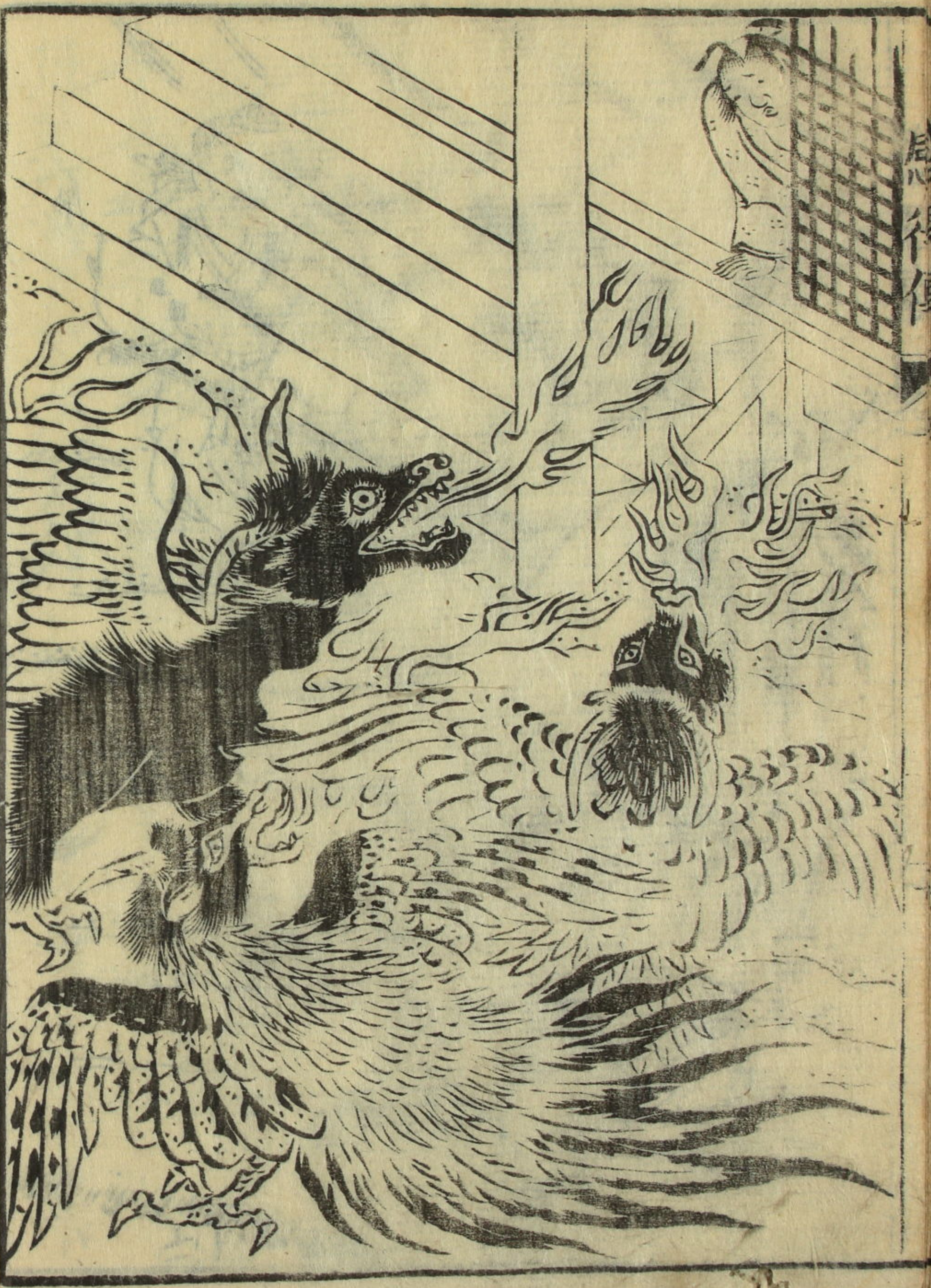


八幡大神より日課念佛を授けりしより後ハ。及ばず。其の誓ひ
唱へて祈小法して。も念佛をのし。移りて。ふ

かくて廿六日の夜に。ありし。業障をより。観音菩薩とて。途
中。生霊法として。不も。跡より。大音に。く。其の
る。忠あり。其の誓ひ。山とて。大木の。根。も。倒。り。が。ぬ。し。
恐。地。を。り。き。て。わ。り。し。ん。獲。だ。其。長。八。尺。餘。此。赤。鬼。青。鬼。と。の
間。一。所。へ。り。に。進。来。り。ぬ。肝。總。も。満。く。矢。を。道。の。傍。り。に。た。を。き
依。り。て。り。る。者。を。り。く。あ。そ。く。人。公。地。に。て。き。首。切。り。け。て。あ。く。を。し
ま。は。何。れ。の。も。り。ん。を。ぬ。け。り。く。あ。ひ。る。へ。所。を。て。り。り。ぬ。毎。夜
此。の。誓ひ。も。計。し。て。そ。の。う。り。を。帰。り。と。志。け。た。が。され。た。あ。ひ。き。り。大

形を成就せられて止る。心は悟さるなりと。なり。い。う。一。く。
と。ま。り。祝。言。せ。り。と。あ。り。通。夜。して。東。雲。に。不。と。ふ。海。ぬ
○二月二日の夜。業障をより。祝言せり。の途中に。祝言せり。
の山。依。然。と。現。し。来。り。汝。又。の。重。病。を。ぬ。り。ぬ。毎。夜。二。玉
落。る。も。ま。ど。い。あ。き。孝。心。を。し。海。く。信。心。多。く。は。正。氣。成。就。を
得。し。り。ぬ。様。た。を。見。物。法。一。路。ひ。り。た。お。り。く。を。い。ま。す。は
我。ハ。是。山。神。なり。と。誓。へ。ば。忽。一。陣。の。風。吹。来。り。雲。ひ。き。り。ぬ。ま
草。木。亦。も。震。動。して。此。法。の。い。ふ。く。を。り。り
○又。或。夜。祝。言。を。せ。り。を。願。せ。り。に。前。を。も。大。き。に。く。る。者。も
は。し。の。り。て。り。し。バ。頭。ハ。半。の。お。と。く。に。く。五。回。が。り。け。知。り。ぬ。志





ころり。口より火焰を吐羽をきして堂中を月が帯く真らに集るお
 それおのききく。高勢に念佛やせしげ。物道なき失くはり
 ○同六日観音堂小通夜せし。寅刻をうりに其長堂の折端
 とひとてきたる。き姿の者八九人來り。其内一人大音ゆくと死
 喰物あり。明夜必取と念ふべしといひて堂前をぐる。今一分
 發したなき念佛をす。居ればすまきや。屏る。咳く。其足
 音堂しゆらにけり。りてすまは。若し座堂内にてぬらひ
 く念佛し居る方内。夜もそておのけし。け家。ぬらひ
 ○同七日の夜。おのひ。必變化の物。命をそ。ま。し。一室あり
 中。おのひ。酒を。ぬ。母。服。乞。の。酒。を。す。り。と。記。



云。疲を慰ん為酒をあふべしと。意ハナシ七八日此女入
 る。其子と。當と。指す。研きてす。わ。湯。入。を。行。い。身。を。之。其
 ま。で。飲。む。心。其。味。天。耳。痛。も。か。や。と。笑。ひ。し。死。脱。此。女。即。別。聖
 こ。面。向。く。欲。舞。の。被。を。ひ。ら。ぐ。と。よ。き。座。を。有。ぐ。わ。湯。下
 〇。か。て。上。福。の。女。姓。侍。ら。れ。る。へ。女。只。ら。方。種。精。進。に。念。佛。し。て
 極。樂。淨。土。を。死。之。し。教。の。ご。う。念。仏。せ。ば。家。又。よ。り。く。瓶。を
 玩。して。海。を。ぬ。し。又。一。公。に。念。佛。中。さ。び。ふ。か。き。病。も。使。然。止。ま
 一。し。と。え。時。と。向。を。入。れ。バ。忽。然。と。して。高。度。之。の。あ。ら。る。る。
 其。上。に。此。長。七。尺。斗。地。産。焉。を。一。婦。ひ。て。説。法。し。は。し。し。も。也。
 こ。の。法。云。此。中。に。毎。日。人。回。の。息。二。万。七。千。七。百。度。一。息。も。佛。の。方。一。ハ

は。守。第。二。悪。乃。の。方。一。は。る。し。は。く。也。余。終。ら。時。ハ。け。思。ふ。此
 息。凡。と。念。が。て。二。悪。乃。之。隣。を。下。し。念。佛。を。唱。へ。淨。土
 を。彰。ふ。公。二。回。一。乃。智。者。有。り。と。一。又。稱。念。む。かり。た。く。ハ
 幾。生。均。ぞ。う。ま。一。き。も。念。佛。を。疑。念。の。公。及。う。う。う。公。半。里
 づ。極。樂。に。遠。ざ。う。る。也。又。其。末。に。念。佛。も。う。一。ハ。江。記。や。本
 毎。日。千。返。教。を。す。し。て。を。念。死。と。た。と。行。志。杖。履。を。用。ひ。て
 念。佛。一。返。の。功。徳。ハ。十。八。萬。八。千。億。劫。の。罪。を。滅。す。る。なり。し。
 山。ま。ぐ。き。ふ。と。さ。こ。り。も。も。仰。ら。れ。の。也。も。く。一。ハ。八。毫。一。ハ
 〇。二。月。十。二。日。し。夜。ハ。と。中。を。け。を。風。を。け。り。大。雪。も。積。り。れ
 ども。い。つ。も。の。と。く。支。度。し。て。病。ぞ。き。ま。る。ハ。情。高。き。の。業



愿神傳



昨者よりある坂下に。吹雪に逢ひ。路もなす。口を吹雪の
 下へ入り。一丈あきり。此雪の中に落入り。上るとまれば
 叶いぬ。泣きけり。甲斐なる。改め。息もきき。にるりし
 が。我佛神と云ふ。果て。て命終る。父の病
 も又。後を。いふ。念の。あり。と。いふ。念。は。ハ
 打ち。く。父の。病。の。歎。み。例。乃。孝。心。お。き。は。く。思
 漢。也。誰。の。志。は。忽。ち。と。より。髪。を。引。上。ら。る。者。に。至
 暎。び。た。そ。や。と。り。え。ん。れ。ハ。其。終。六。十。あ。ま。り。け。る。増。え
 き。衣。を。穿。け。白。き。裸。脊。馬。を。曳。来。り。若。し。至。り。身。の
 平。も。打。拂。ひ。て。彼。馬。に。糸。を。結。ん。だ。馬。の。糸。す。り。流。れ。札

成得傳



惠得傳



乃ち燈立のふるとる小敷方たちより留とどり小なる。春天地
 長閑のどかなるがまじりにそんじ。扱あつかひ此借世馬しよせうば新あらたんでい約いひやくといふなり
 堂どう別べつ苑えんがごとく中ちゆうを走はり。志しげし。方かた小茶呷せうぢやうおきに念ねん及および
 一匹馬いっぺきばより下くだり。堂どうのぼりて礼念らいねん。一ひと堂どうをおひ。破やぶれ借外しよがいに
 注つりて。又また彼かるに水みづのせ送り。ゆり

○茶呷堂せうぢやうどうより善ぜん善ぜん後ごのかごらるる十二人じふににん幡ばん天てん蓋がいる。どじり。ちり
 ちり。ひて馬うまの善ぜん後ごをさか。かみて送り。ゆり。其その内うち一人ひとりの善ぜん善ぜん後ご
 作つくれ。い。ま佛ぶつして極樂ごくらくに往生おんじやうす。人をひと我われく十二人じふににんをかくれ。かく
 送おくる。と。空くうひ。たる
 扱あつかひ。堂どうに。く。馬うまより。た。り。ゆり。て。志し衣いの借しよと。る。り。ハ。我われハ

これは乃なほ氏うぢ神かみ八幡はちまんなり。と。佛ぶつされ。光ひかりを放はなて。飛と去きゆ。十二人じふににんの
 井いと。る。し。湯ゆの。ひ。ぬ。あ。ま。り。首くび新あらたなり。此こゝ跡あとを依よ拜がいのし。別べつ鏡きやうを
 堂どう上うへり。公こう輝きく。念ねん佛ぶつして。居ゐる。ふ。大おほる。光ひかり物もの堂どうの。内うち。雷かみなり
 の。ま。じ。り。唱なり。それ。が。は。い。ふ。と。高たか勢せい。み。念ねん佛ぶつし。け。ふ。ら。光ひかり物もの。ち。ふ
 け。ま。り。光ひかり明あきら四よ方かたに。か。ぎ。り。た。忽たちち。堂どう内うち。後ご。た。り。ゆり。く。向むかひ。ま。り。小
 群ぐん起おこり。る。る。る。ち。に。向むかひ。雲くも。あ。り。く。と。亮りやう塞さいせ。り。其その雲くもの上うへに。た。り。方
 ま。弥や陀たの。こ。ろ。各おの各おの長なが五ご人にん餘あまる。る。住すま立たし。結むすり。其その次つぎに。観くわん世せ音おん
 三さん十じゅう二に瓶びん。い。つ。れ。し。れ。長なが五ご人にん。い。つ。り。に。く。末すえ敷しき蓮れん花はなを。持もちし。念ねんま
 に。糸いと。と。て。立たゆ。り。又また茶呷せうぢやうの。十二じふににん池いけ。将しやうと。え。き。し。る。ゆ。り。其その実みの。方
 小こ。た。さ。一ひと圍い。ぐ。り。れ。合あ。色しきの。寶たから樹じゆ。あり。大おほ枝えだ。ら。り。く。り。れ。小こ。條じょう。四よ方





り仰ぎそへん也。地底井は長七尺をくりぬく。其に炎珠錫杖
 を持て立落るるが告て宣はく。汝も父が病由をんをす。とて
 錫杖柄を指し。錫杖柄は右肘也。はぎて踏むる。連
 花の裏下れ一葉に坐せ落す。我身の起くる。焼く麻がうらむと
 のや。えい。それより北の方へ少く坐せ落す。思ふ。慈小言也
 乃ち。あまのつらり。みさるい。茶は。茶湯。蓮花の下に。白雲一屯。若
 につき。まを。まを。して。離れ。茶の。中。頂上を。拜す。は。光。園。夜
 こ。松。明。を。ん。ら。か。く。光。四。方。に。り。ま。き。其。餘。光。茶。の。通。り。と。こ
 させ。路。の。筋。二。所。餘。も。か。く。ま。き。の。茶。の。相。好。乃。は。つ。く。と。味。く
 い。らん。方。め。く。ま。ふ。く。ま。え。の。相。好。に。陸。い。ま。ふ。て。空。に。下。界。一

ぐりてえ也。其周にして二の角もさつげん。幾千万とて下れも
 かぬ罪人ども物をしひんぐおととま下ににけり。の事也。毎々に
 下くぐりい道のり。もてふりてふ。不修。其系。又いさせ。道
 往。本百。及。たり。も。か。り。の。石。は。多。え。い。半。田。村。より。修。場。へ。約。二。百。里。あり。
 上下に。く。八。に。百。里。の。道。あり。
 下界へ。下り。て。お。よ。向。ひ。て。行。く。事。凡。二。百。里。に。り。さ。ゆ。て。向。の。方
 一。ま。あ。す。ま。は。は。ま。き。巖。石。を。な。や。え。る。大。高。山。あり。け。山。乃
 中。に。居。長。一。丈。斗。此。老。波。一。人。あり。其。髪。向。して。膝。の。不。り。を
 ぬ。れ。肌。膚。白。く。片。袒。り。眼。の。大。さ。六。七。寸。に。り。鏡。の。か。く。て。り。か。や
 く。其。ま。眼。の。光。に。く。け。不。照。し。若。眼。を。塞。れ。也。を。忽。ち。周。る。る
 也。口。斜。一。片。の。際。も。切。あ。ぐ。り。上。下。此。牙。の。い。遠。く。け。不。に。来。る

罪人を。わ。つ。け。ら。う。指。お。れ。も。も。も。ら。て。た。け。め。し。く。三。月。と。へ。ん
 ぐ。じ。い。老。婆。の。し。ろ。く。太。本。あり。枝。じ。ふ。由。き。帷。子。の。ご。ん。死。あ。の。ま。ま
 無。う。罪。人。と。え。し。て。男。女。靴。一。群。集。り。其。靴。皆。あ。ま。く。
 眼。を。入。牙。地。い。ま。は。細。く。腹。大。う。く。れ。咽。が。く。く。と。く。此。の。劍。の。か。く
 と。が。り。僧。侶。男。女。の。房。別。も。ち。り。く。へ。ん。を。く。じ。凡。出。る。八。頭
 向。く。を。取。り。え。し。ま。の。取。り。て。ま。く。ん。く。い。
 ○其。年。其。長。九。尺。に。り。或。ハ。牛。の。乳。或。ハ。馬。の。頭。好。く。慈。方。の。毛
 劍。の。か。く。送。り。生。り。牙。より。常。に。痛。り。え。出。罪。人。を。ん。て。腕。を。い。し
 び。り。呼。ぶ。智。雷。也。罪。人。を。み。く。肝。魂。を。失。い。あ。き。れ
 果。る。律。に。く。居。る。不。地。其。年。大。其。罪。人。を。一。人。も。残。さ。ず。西。復

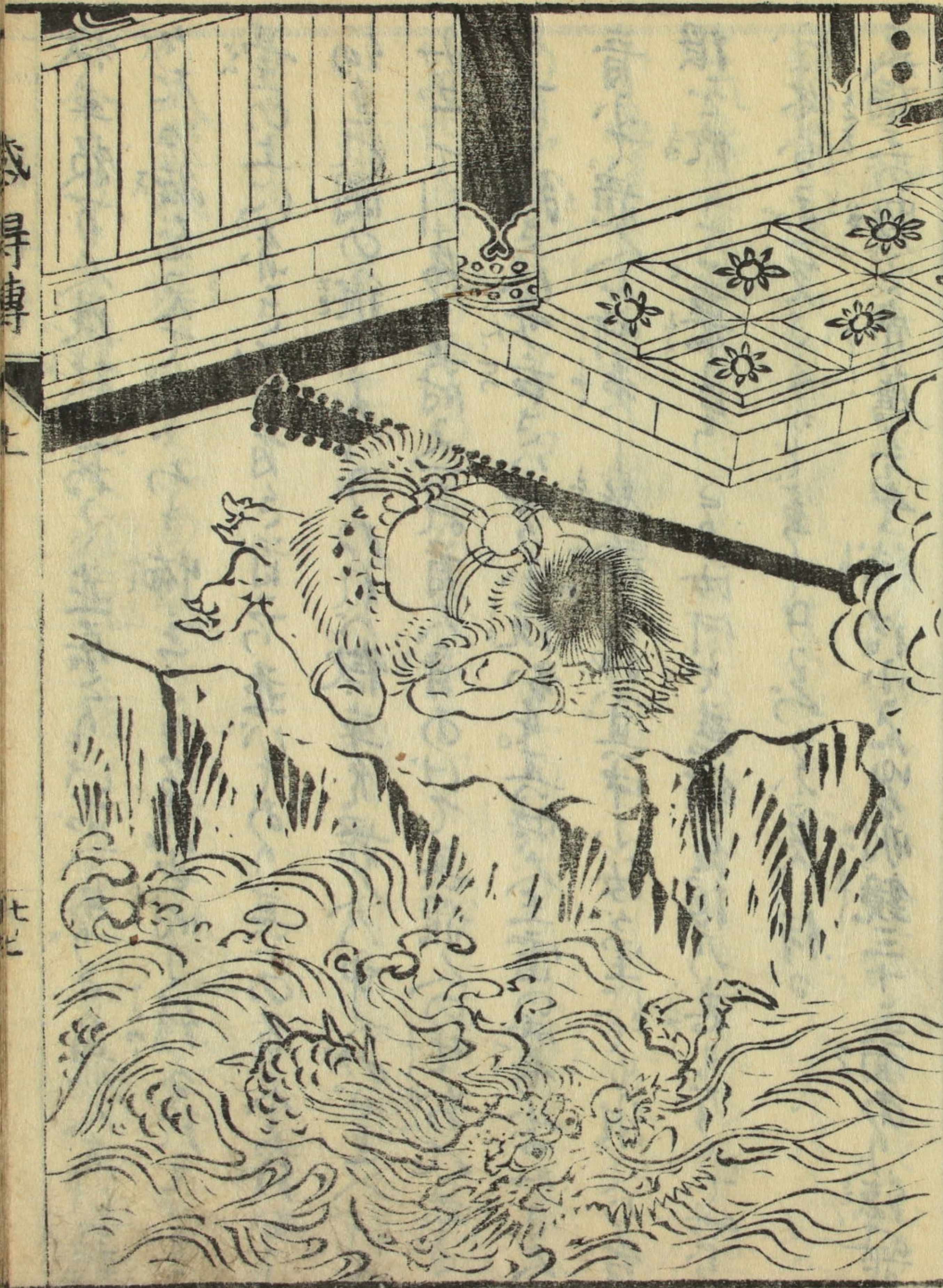


下は踏たをし。死ハ血を打立あふ。川はみへ死より星に寄まで
 其波ありくと別きぬる外。獄卒たうしう。投きて。或ハ罪人の
 足を取く。鞠乃やく虚空へ蹴あげぬとハ。或ハ罪人虚中に
 蹴あげられ。死よ木の葉に敷みさうに落ちる。須臾有て。其
 罪人九谷を急る。流る。流る。流る。皆大懸。岸上へ落ちりて。悉く
 おひひる。哭ふ。嘔つ。さきより。火橋を空をよのふ。流る。のや
 多とく。ん方れ。響ありて。罪人九谷。一。死。上。げ。不。成。び。る
 深く。落。不。懸。と。て。い。あ。そ。皮。を。と。れ。さ。る。飛。人。ハ。一。人。も。な。し。其。刑
 取。そ。れ。皮。を。獄。卒。九。集。り。て。喰。食。す。る。流。り。の。ま。す。り。ゆ。く
 さ。死。よ。大。河。あり。い。何。水。の。急。暴。に。あ。ら。う。に。し。て。流。ま。の。早。き。事。案。



村々をいづれ河のやうり常に大風をけく吹来り。海濱の
 叢寒いふもあつた。此寒風はせむ夏日のかくそん田し
 飛人といは寒風は吹切れ頭手足あど木の葉は数ぐやう数十と
 かく虚空より落来り死の飛人全隊は下まてつけ来ることも
 又いそ風はまきく昔のいそ風あどの飛人あつたといふく肝魂
 を消し血吐きおれ外間えられむら夜目もあつたといは河
 魚の飛人といき風を降ぐんと岩石を某り洞穴をあけり其
 中にあつて烈風を去のぐんとそれ外より飛人た来りてそ穴
 をくびつぐしのい喰のいたぐいよ身より血を流し。お振
 くれて倒き居る飛人を数車に川裂をくらふ下もあり。

○又夜の大方飛人とい河原へ帰つて居りてをのれお
 頭を折りたり。なごり血をまみくすけのしてさけい居るもお
 びつりしげ中にいづれ飛人者と止よ近付て大地をさきこりよ
 ち我のいひおにお果の下へ入るにち我け下して急坂降り
 なる若をうけゆる。念佛は返る者おれしとち血の流を流たり
 又其若の日月五月に又軍にてお帰し。ち血を流す味きんが勢とお
 がくそ帰る者といふ。ち血を流す味きんが勢とお
 け不快者といふ。ち血を流す味きんが勢とお
 さ数十丈もあつ。飛人といは山の麓に迫りて血を打立。数人のい
 のやりにのがる。ち血を流す味きんが勢とお



獄車救万人。鉄杖を執り、並居り、いふ一車りける。罪人九十九人、
 杖を執りて、母を執りて、怖まくる。有る也。時、傍るに、
 臺の上に、赤き首者、首を並べてあり。其の首、大なる。其の
 何れ、圓の鉄、よりのれば、獄車九罪人、乃中へ、みどき入、けり
 み出で、い来る。其時、又、一罪人、大音あげて、其罪人の、生、おれ、
 を下し、鉄、大音、古、い、わ、く、不、説、お、其時、大、王、雷、の、震、お、お、
 音、小、て、罪人、を、所、責、一、教、諭、し、給、其、中、小、女、が、室、に、て、も、泣、か、
 根、を、修、一、と、不、生、り、汝、何、を、慈、悲、を、根、乃、志、も、な、く、て、世、を、
 小、女、が、不、説、さ、よ、る、と、言、ふ、り、う、く、不、説、て、侍、り、
 又、偏、王、の、賜、し、席、薦、三、を、鋪、行、小、ん、ゆ、り、明、鏡、三、三、面、あり、鉄、罪、

くの平掃にかぞく、平、罪、過、を、除、し、縛、ふ、の、あ、れ、バ、獄、車、中、に、は、り、ん、で、
 鏡、の、前、小、は、ま、り、ん、せ、し、れ、バ、一、生、の、要、り、後、り、鏡、中、に、あ、る、罪、人、
 二、三、を、ん、て、陳、ま、さ、言、も、か、く、大、に、悔、ひ、の、罪、あり、此、花、を、り、
 小、女、鏡、を、ん、ま、し、と、錫、杖、を、手、に、あ、び、く、み、せ、り、給、う、り、が、放、郷、
 の、有、次、歴、述、と、して、白、き、座、十、二、案、乃、時、迦、訶、の、友、を、見、い、ま、れ、
 八、月、廿、三、夜、他、の、油、の、青、太、豆、杖、ね、も、み、お、い、ゆ、り、し、給、あ、り、く、鏡、
 に、う、つ、ま、り、其、外、他、人、の、お、る、科、も、明、く、く、み、し、か、し、茲、小、述、
 一、人、ハ、大、なる、筆、杖、持、入、の、鉄、杖、を、持、り、送、り、お、も、罪、人、へ、向、ひ、
 ○又、罪人、を、送、り、出、ま、お、あ、り、世、不、威、嚴、る、れ、官、人、一、人、を、そ、り、

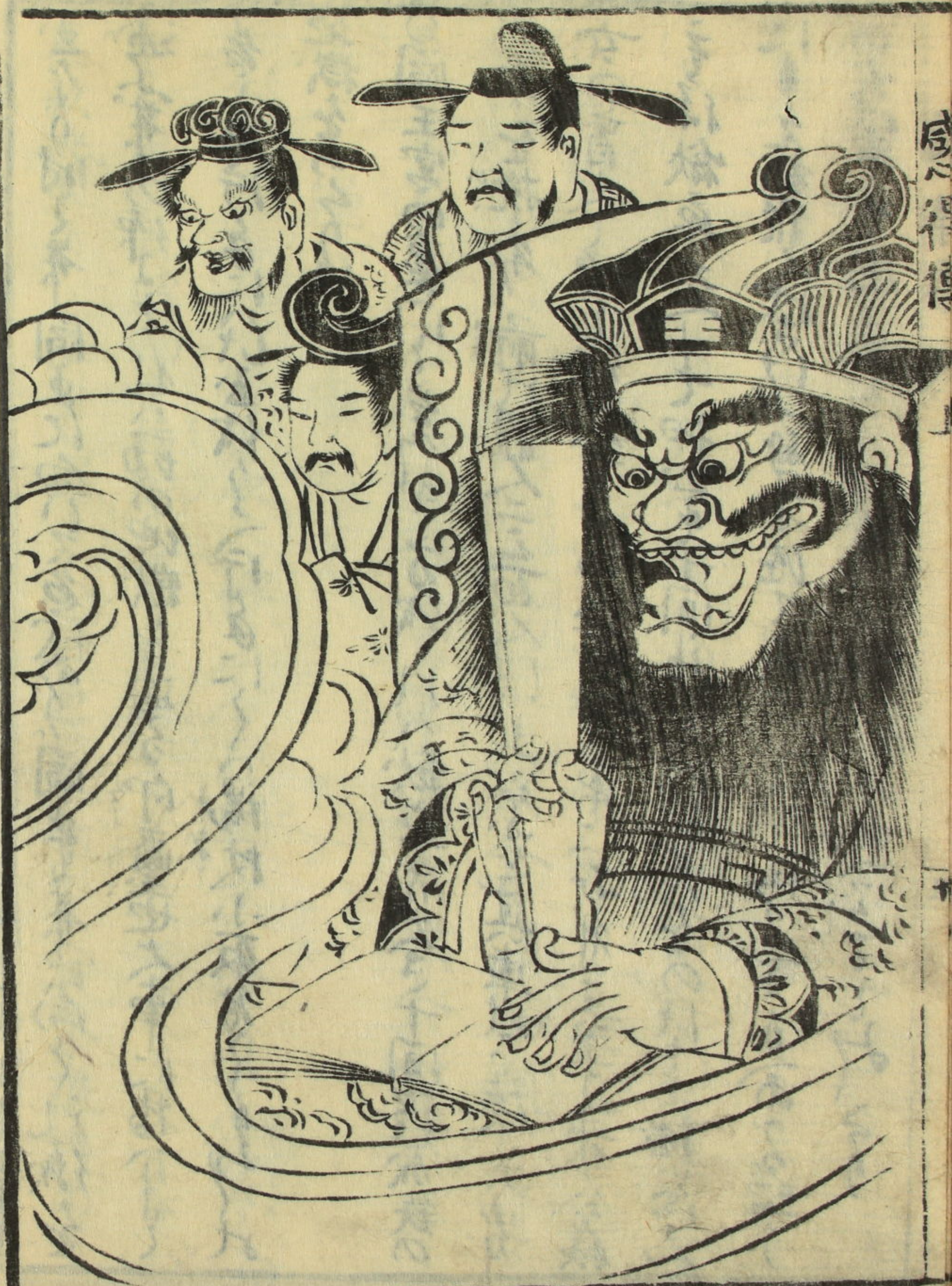


何事やん作流... 其の中に... 言の終...
て... 言の終...
に... 言の終...
の... 言の終...
の... 言の終...
あり... 言の終...
を... 言の終...

○... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...

玉なり... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...

○... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...
... 言の終...



○まより登るに下り。これ地獄に至る。廣大な野原ありて。罪人を糶かたく
 集居あひまけるが。大地のまが。こより極火ごくわりえもの。罪人を互たひはみ合
 合あひあひ號叫ごうきょうを糶かたく。約およふ十里じゆりづり。まき。向むかふの空そら二面にめん。あ
 らん。べ。罪人ざいじんも。まよおれ東西とうざい。池いけまがり。爰こゝは道みちれんとする所
 也。らん。同どう。その流なが。氣き次第しだいに迫せまれん。大だい山の如ごとく。大だい火くわ聚くわにて。
 大浪おほなみのよすま。かくき。ちん。に。極火ごくわち。ば。に。陸りく。大地だいちより
 も火くわ盛さかより。あがる。罪人ざいじんを。下くだより。出でる。火くわを。道みちんと。弱よわき。老おいを。下
 敷しき。上うへ。と。ま。ひ。と。極ごくの。あ。ひ。極ごくの。山やま。れ。く。す。ま。る。火くわ也。
 下くだより。え。あ。がる。極火ごくわと。こ。た。り。て。罪人ざいじんを。其その中ちゆうに。つ。ま。れ。お。あ。ま。さ
 叫こゑて。燒や。こ。る。故ゆゑ。天地てんちも。腐くさる。づ。り。す。ま。は。く。ま。え。い。お。て。火くわも

次才しさいに。志こころづ。ま。り。罪人ざいじんを。と。く。ら。消く失しつて。野原のらの。如ごとく。あ。ひ。べ。又また。間まの
 ろ。あ。ま。が。こ。よ。り。火くわ燃もを。罪人ざいじんも。次才しさいに。出で。来きり。て。又また。前まへの。如ごとく。は。ら
 こ。あ。ま。の。その。叫こゑ。聲こゑ。の。如ごとく。に。囚こら。え。い。地獄じごくの。罪人ざいじんを。噴ふ。吐き。志こころの
 深ふかき。車くるま。餘あまの。地獄じごく。に。勝か。き。り。并なら。れ。作つく。り。地獄じごく。ハ。名な。法ほう。地獄じごく。と。て。貪あま
 欲よく。偷ちゆう。盜たう。愚ぐ。痴ち。の。若わか。者もの。な。り。と。
 ○又また。地獄じごく。あり。常とこ。に。大だい。る。れ。火くわの。雨あめ。降ふ。り。て。罪人ざいじんを。身み。に。あ。る。頭かぶ。より
 足あしの。車くるま。や。を。燒や。ね。け。并なら。れ。あ。る。ハ。腹はら。ね。る。お。罪人ざいじんの。才さい。あ。こ。も。蜂ちゅう
 の。巢す。れ。お。と。く。お。け。ぬ。き。て。く。れ。し。車くるま。の。ま。り。外ぐわい。
 ○又また。地獄じごく。あり。大だい。山さんの。上うへ。に。義女ぎにょ。あ。ま。し。集あ。り。居ゐ。る。林はやし。も。れ。罪人ざいじんを。招ま
 く。鬼人おにじんを。あ。れ。を。こ。ん。て。我われ。さ。れ。し。心こころ。の。上うへ。に。小こ。山さん。乃すなは。草くさ。な。ま。ふ。劍けん



のぶく。其下に向いて逆さふせしう。けい葉に身をささるる血を
 塗れる。この山頂よりれば、美女どもやがて谷より下りて招く
 車前のや。又罪人さへも。其中鉄林よりぬれて倒さる。ひ
 居たるもあり。衝谷（運送）われがの美女忽ち悪鬼。其音に
 ては、不も来りも其をたて止むや。鉄棒をひき、教に亦
 ひく。罪人は谷をへつけ、おちりてあ方の山頂より。そ
 ちとぐりて、お棒りか。

○又地獄あり。此の谷深く、其間少く。おひるる。されども罪人の泣
 叫聲、教の音のく、あつてたうぐやくに幽し閑えたり。けい、かき、漆き
 地獄の音も、獄卒罪人を捕へ各一つ、鉄棒を渡し、是を汝

智が食物を求む下し。然る罪人をけり、お谷を投入し、罪
 人を互に殺し、天地も驚くべし。そのおひき、梅を取ら、その
 血を掌て命を續く者、其の作、お山の罪人の腹中に血あり
 へ、臍腑をく。其く、お棒り、棒に付る人、此時をむむれ、
 其く、其苦、お棒り、お棒り、其く、其く、是は、
 や、室し

○又大なる池あり。中に熱湯漫々と涌り。其音、お棒り、
 上は、鉄の細き棒り、獄卒罪人を棄て、お棒り、
 棒の中より、熱湯の中、お棒り、お棒り、
 若し、事、お棒り、獄卒、お棒り、お棒り、



又車のやく此形となる。さき車あまり勢をわしくおりの海。芥に同
 なる地獄とて者なくのなる若くは中と。其窟なく山を穿て河
 と河を穿て山を穿て。此の間の苦をうくる也。此に地獄とて暗
 なる井の先宝珠をかく。かくおけ深へ令色の光明とて夜を
 獄中を照し送り

○又地獄あり。飛人死ん人へ似く胴神ハ牛馬のわくある故多の
 つまり居るふ。背小大石を法ま真上に鉄卒一人つて。其
 詔より二人の鉄卒。火端の出。鉄棒を以て彼牛馬を敲きさる。其
 内ニケハ倍の飛人あり。びくねとくおきそ。鈕のわき思石の上
 を負まいさん。お懸さるくを破る。又すさし。き嘴ある人

鳥あきと飛来り。口より火端を吐き飛人虎の首を噛みさる。送
 八方引強て啄き食ふ。其く海。き事いふ。方は時。井室
 中。地獄ハ牛馬をあけり。近つひ。又此の殺生をり。ころ若
 或は出家の飛人の落る。ホリと。又け。下。南。女。の。音。人。あ。ま。し。死
 を地よけ。是故。な。ふ。と。ま。る。あり。其。壁。の。上。ハ。大。懸。石。を。さ。さ
 け。び。り。れ。し。し。ハ。又。又。又。より。大。懸。石。落。来。く。其。上。に。あ。り。わ。れ
 ば。忽ち火端出く。下の秘名も飛人も悉焼とらけて失ぬ。かあり
 て又このやく。安んじて。若をさる。る。茶。の。ごとし

○又地獄あり。深き谷底。より。光。ある。毒蛇。く。ら。た。り。端
 り居て。頭をたまく。はより火端を吐き。より。落。来。る。飛。人。を



待らば人の罪人毒蛇八足り殺して血を吸ひ合ひ又罪人の乳
 輪を吹くれば罪人甚く罪にさげ多殺し井の作是ハ
 破戒の地おくりたりとが家前に忽ち涼水風視と吹来りぬる
 不殺多れ罪人の目女一人男二人立出の小舟に取巻く所地を
 ばくくし解を多れ人たを毒地の上で踏踏て逃げきぬ井
 作々のいび八人の妻を海濱に立てるき流を男一人追巻の切体
 て今い昔を免まき也地獄を通り時罪人を各々坐をんて
 念佛回向を頼みえいよとぞや普通ふつうに念佛唱られども唯念
 にばり念してこらぬ

○又地獄あり大なる池水ありみちて其中に罪人首をり

お水とぞらられ居るも水底に物を拾ひおぎんとくはあおひを
 其す水つりてとるれも泣出りり井をよみ極楽に往生
 する者あれ地獄の罪人或は其目れられしは脱る事あり
 よろし往生の人を待るの千年を経るや待きにあするの
 作れり

○又ま闇なるふも罪人あまき集りて居るふ忽ちを鼓の聲聞ゆ
 まは罪人同時とたり叱りて犯人相殺す声天地も震や
 善護乃作是は怖栗勝負の業して賊室をんこりに合ひ
 たるもの塗る地獄たりや

○又救千の罪人を大磐石に上り依せ置み其磐石より猛火お



て罪人を焼。罪人此十指よりも火焔おけし獄卒鉄棒を以て打。汝の
くろくを傷ふつらうをいんまをうてくも責まれば罪人を死さ
けびより痛り。血乃涙を流し。くれむあり。井の作ふれ
え。あ結の罪人此来るおれり。

○又罪人を倒し。法をた。繩墨をうらして。吐門より。鋸を挽る
地獄あり。井の作ふれ。世にありし時。法人の中を要し。つら
らり。故といま。海にびき。それ者。の責らる。かなりせ。

○又罪人を送し。はりて。獄卒あ方より。錠をひく。おろき。ほし
し。骨髄まで。お砕く。あり。井。室く。されん。此。思ふ。を。を
中。休む。く。た。る。罪人の。り。せ。

○或ふ。罪人を。あま。石の。物。と。結り。つ。も。獄卒。數。は。罪人
の。口。中。へ。入。す。鉄。錘。を。以。て。上下。此。齒。を。砕。く。は。お。か。ま。又。是。は
此。血。を。あ。ら。ぐ。く。ぬ。き。い。又。罪人。乃。前。と。持。く。の。飲。食。あり。其
中。より。火。焔。の。え。お。ろ。を。獄。卒。罪。人。を。責。め。け。食。物。を。是。地。
へ。お。く。や。鉄。棒。を。以。て。お。擲。する。あり。井。此。棒。と。あ。れ。世。に
あり。時。食。物。の。事。に。け。て。解。く。の。要。る。を。を。せ。者。も。れ。い。

○又。方面。二。里。行。く。深。谷。あり。其。中。に。火。糞。泥。と。り。く。り。獄
卒。より。板。万。枚。罪。人。を。は。み。く。遠。く。糞。中。に。投。入。し。糞。泥。の。中
に。長。三。三。尺。さ。り。出。ま。死。る。も。り。く。落。る。其。色。灰。石。毫。く。み。か。し
去。の。虫。上。り。落。下。る。罪。人。を。治。り。て。お。と。く。を。其。方。に。取。る。

或ハ頭より喉へ喰ひぬき。背より腹へぬけ。その取付たる事ハ表の
毛をころがわし。罪人を糞スルより尿をおし。これけるる息を
衝く。其息ハ五臓のちかく立のかり。四方に散りて臭き。ゆゑに
とろにのほし。時々并室へくろの持する。印を鼻を鼻とあ
ても。教のやくまれば。よりのくなるふやいせ。忽ち思息
を忘れぬ。其外劇苦の有様を見聞して。きこえ。死下しては。こ
の玉を目小あて耳小あつへ。を室ひ一丸。そのぶくし。ゆるふ
りかくれ。これをらる。一と成除さゆい。まよ。糞泥の中より。ひ
そりれ。罪人のそのの思石は。は。い。漸。若。く。巫。一。向。い。く。罪
けるる。夢に。く。く。や。我ハ。は。か。つ。又。若。四。部。の。母。たり。罪。業。ま

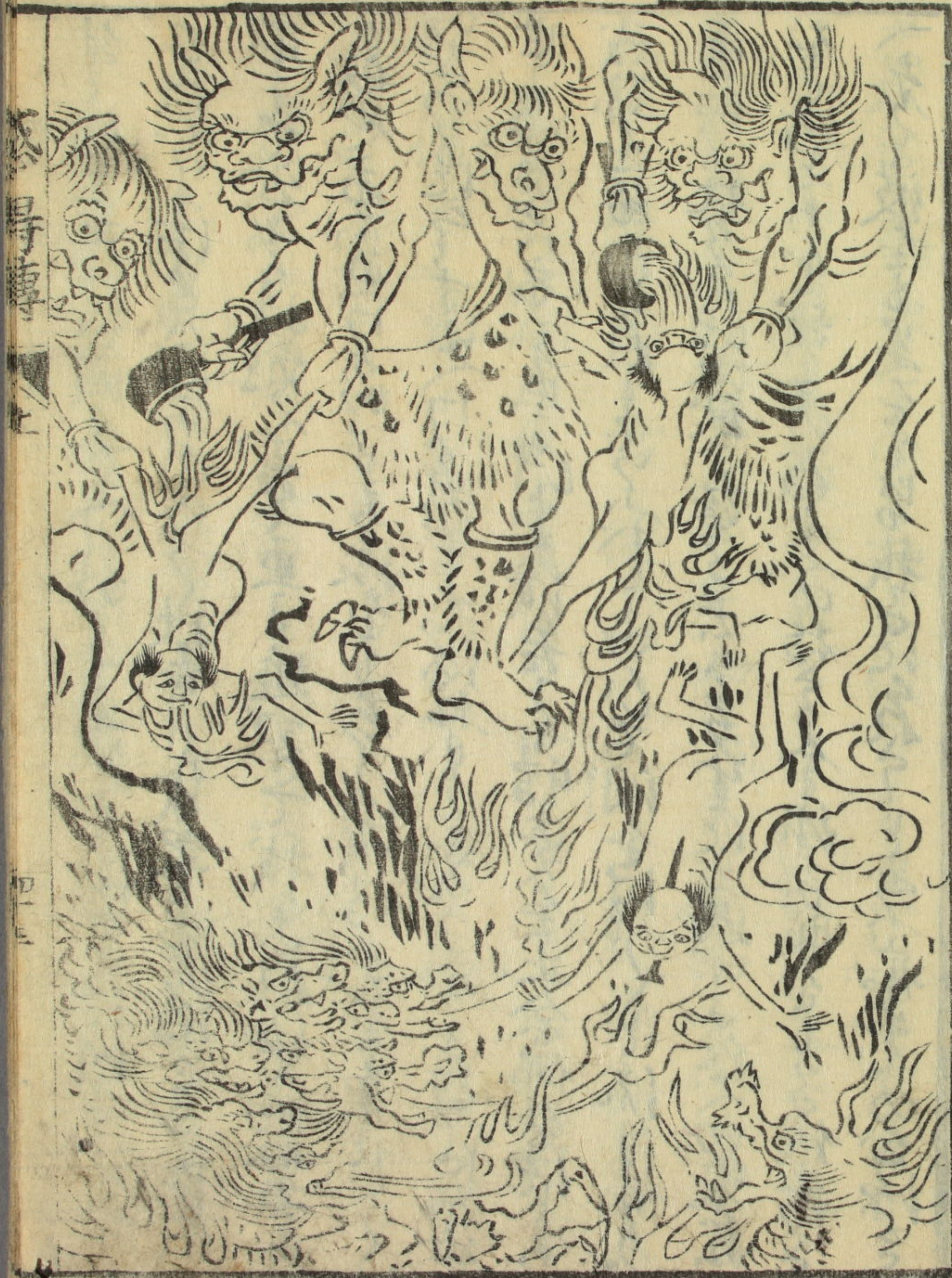
くして。地獄に墮て。罪。一。成。ら。け。く。ま。ふ。は。し。を。ぞ。れ。じ。而。そ。の
子孫ありて。まき。跡。を。あ。ひ。く。り。身。也。終。く。く。若。四。部。邪。見。に
て。佛。も。法。も。あ。ら。ん。又。母。の。逆。害。を。も。る。ま。だ。二。十。七。年。の。遠。を
よへ。佛。事。を。も。當。し。り。げ。く。り。を。も。た。し。の。り。ん。と。お。た。し。に
さ。か。た。く。て。あ。は。さ。く。我。を。目。小。あ。及。ま。で。魚。肉。を。食。ひ。たり。汝。世。に
歸。ま。は。い。く。を。若。四。部。に。終。り。き。せ。隨。分。念。佛。終。る。と。い。つ。け
苦。患。を。す。く。ら。ん。も。要。慈。を。は。ぬ。ん。若。四。部。が。病。氣。も
候。然。ま。し。あ。ど。終。る。中。に。又。救。る。の。患。身。中。に。喰。入。て。く。し。し。
血。の。洞。を。流。して。糞。中。に。落。入。ぬ。亦。れ。作。く。是。ハ。糞。湯。地。獄。と
て。念。佛。法。を。誹。謗。する。者。墮。ち。る。不。也。又。後。に。ま。る。ま。る。と。生。け。る

を又毒田多し後しに母の尸せしふる人事をいして
懺悔してたり

○又方面二里行よんゆる池あり其水の色黒き其中に身
八頭の毒蛇殺取らるる顔をくらへてくるふ虚なりより罪人
落するなりをさへ若胴筋を五尺半の大釘にて打ぬらんを
其殺ぬの罪人を毒蛇あつたりて各八方に引たりはより大編を
吐き人き小乳唯しゆに罪人死すくに裂裂くるる其毒蛇の唯
じ後百千の雷れやく物一芥の作よ是れ祝し向ひ橋筋たる
まのまゝして晝夜苦をくらるなり也

○又熱湯地獄あり谷深く磐石をいひきり下に廣き三重すたは

えゆる石の竈あり法の罪人の竈中沸湯に落入る。身津
あしくを馳け鑊の口をめぐりけ鑊にがりきにありて熱湯や
そく流き流落其下に小き河より河水を冷して法の罪人は河より
送りおろす河の上には雲より大さふおひりり其中より怖き法の
老若男女も罪人を山の上にて遠ひのふきに其山峻迫りて上るま
ふあまれば案倦するに竈の上母生かしたる人本あり。飛
しむいなるはつと先中と池上る時よは本枝竈の上へ焼
かやそ戒は豆ばかり沸湯ふひるるあり。膝より下煮
らるるも有てらけしさけよ内と忽ち其熱湯あしく
わく虚なり。湯あがり。夫本も罪人も一時は向の磐石を打



付れて若し同墓之つて飛人を瀬の冷河に落入て
 本のおく法をば。まあの志をば。若し彼等の事終るるにば
 不とて。どこの飛人を。若し。追つきて。我より。汝が。何。母。而。並
 が。母。也。而。並。つ。が。の。る。も。根。を。も。志。ん。ん。情。事。を。事。し。し。く
 つ。う。に。ら。す。ゆ。け。つ。が。飛。を。で。泳。也。り。か。く。る。が。は。し。汝
 世。の。海。の。お。い。ち。事。故。若。く。情。事。を。止。念。佛。を。は。し。あ
 我。跡。を。あ。い。し。れ。も。と。つ。し。と。い。て。泪。を。は。く。と。流。し。り。
 并。何。れ。る。に。地。獄。に。墜。る。若。く。多。生。に。も。遇。ぐ。死。大。切。の。念。仏
 を。も。つ。と。わ。む。我。子。の。為。め。の。持。る。今。法。衣。服。を。も。つ。候。い。あ。と
 へ。そ。う。彼。を。も。是。を。も。皆。我。子。に。え。れ。と。と。云。上。悲。悲。の。公。深。き

若。或。は。妻。妾。を。を。あ。く。呵。と。掠。り。こ。る。若。の。法。を。な。り。と
 ○又。獄。車。も。多。多。の。罪。人。は。足。を。とり。て。道。に。は。各。二。人。の。獄。車
 あり。と。あ。方。より。法。入。の。獄。車。へ。糞。門。より。熱。湯。を。つ。ぎ。込。め。忽
 ち。は。より。ね。ち。お。き。く。地。に。墜。ち。極。火。り。え。上。れ。ば。飛。人。は。身。許。さ
 ち。ぐ。き。と。ら。け。そ。の。獄。車。鉄。棒。を。た。た。て。て。呪。い。ね。れ。ば。飛。人。は
 形。復。す。又。責。を。受。る。事。ゆ。の。か。し。其。の。ゆ。え。に。酒。を
 法。が。若。の。法。を。あ。り。や。む
 ○又。飛。人。は。手。杖。を。あ。り。し。り。獄。車。は。より。沸。湯。を。と。き。こ
 わ。ば。たち。ま。ら。肛。門。に。な。れ。ば。飛。人。志。を。く。融。け。尽。く。又。呪。い
 て。よ。み。ぬ。れ。ば。若。は。あ。る。り。あ。の。志。と。し。其。の。ゆ。え。に。酒

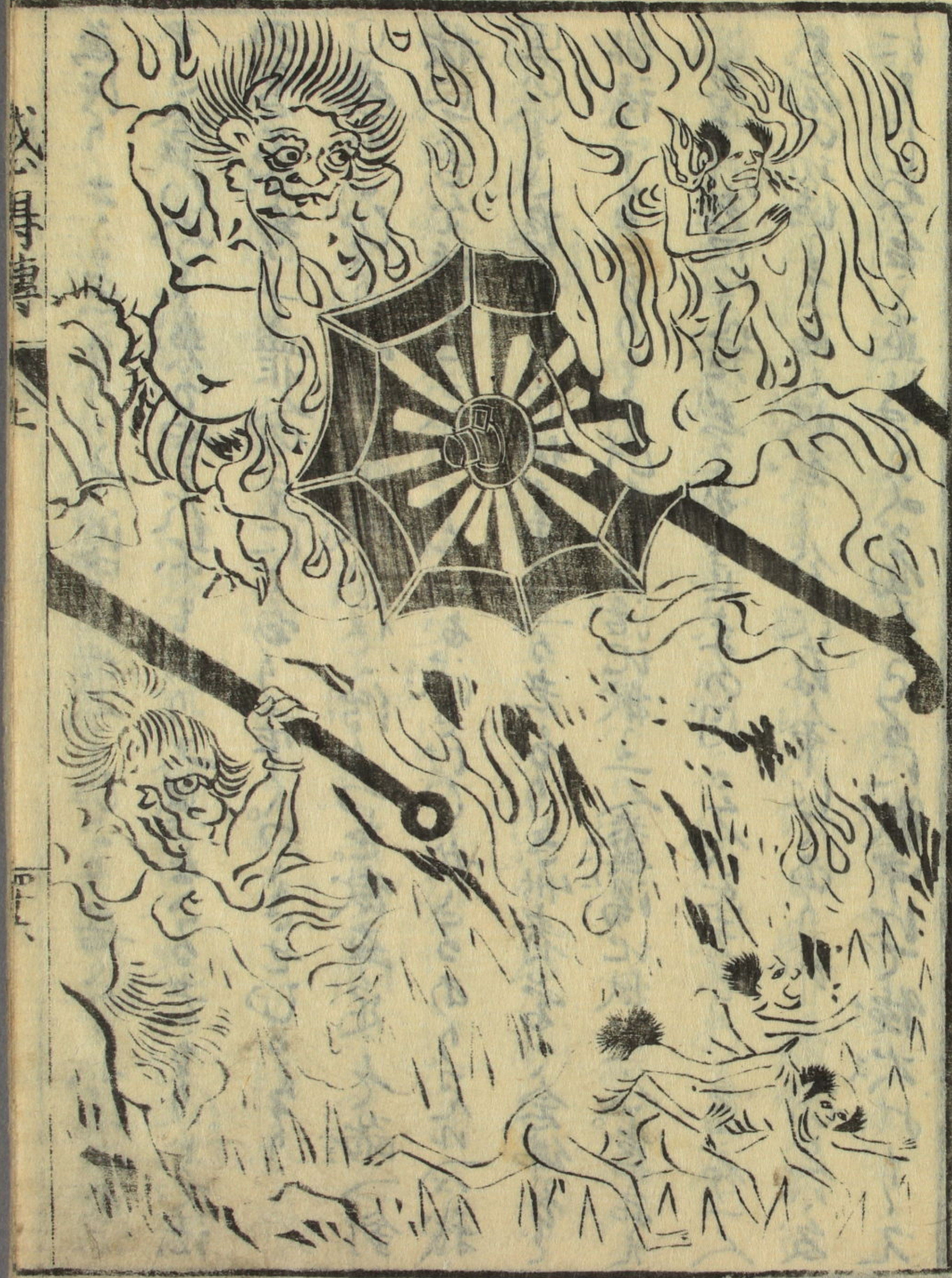
飲む者の毒を地におくると

○又大なる谷ありは下の罪人の苦惱の形あり信ハ一人は虚空に
倒し降りたれ其救済する方ももわれを獄卒たふぶく熱湯を
持来り肛門よりつぎのれは血ち脱胎をうけて地は極火を
如てり上る罪人一夜に晝て天地震動するむりその利

○又地獄あり鉄火車一輛極火さうんにいへあがり其中に一人
の罪人をけおれて燵柱のおとく啼叫なげきであり井の俵はしを
を汝が又右四布有り其身罪惡深重故に命はまじ終おれ
魂たましいは記さるく惡報あくはらひは墮おちしてのる苦患くるしみを受る自業自得の
まじかり是非あやまちなき事之爰にてけ責せきをうくふゆ妙女婆めづらなれ

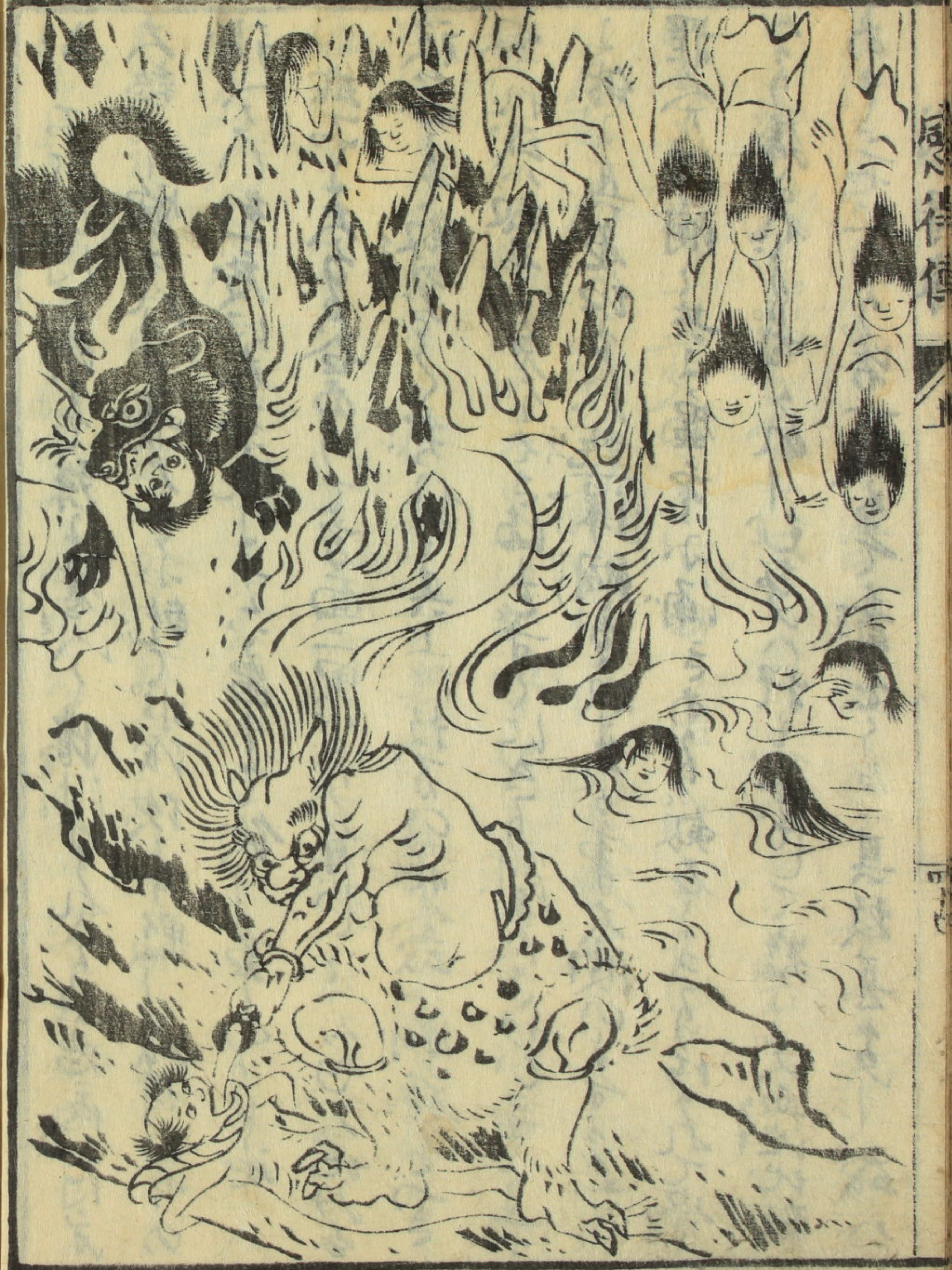
次つぎとして大惡病を受く。汝婦めづらなをば右四布小し事をあしめ極分
み懺悔ざんげ念佛ねんぶつせさす。念佛の功徳有りては極善生ごくぜんせいにとも
快復くわいふくもく。至誠しじやう念佛を信しんじらる獄中の魂たましい火車の苦
役やくのぐまじさあはをのほく被り惡病も平復するふと依をん
し。若し更くは若しに城しろを悲傷ひしやうの思おもひはまき入む。立回場たてまわばは
断つたがましく。忽ち火中に飛入く。この苦は代りんとす。獄卒火車を死
がわく。去ぬ。おし。直せん。こなり。惘然ぼうぜんとして居る。はあもける。海り
おして。おげき出。し。つる。

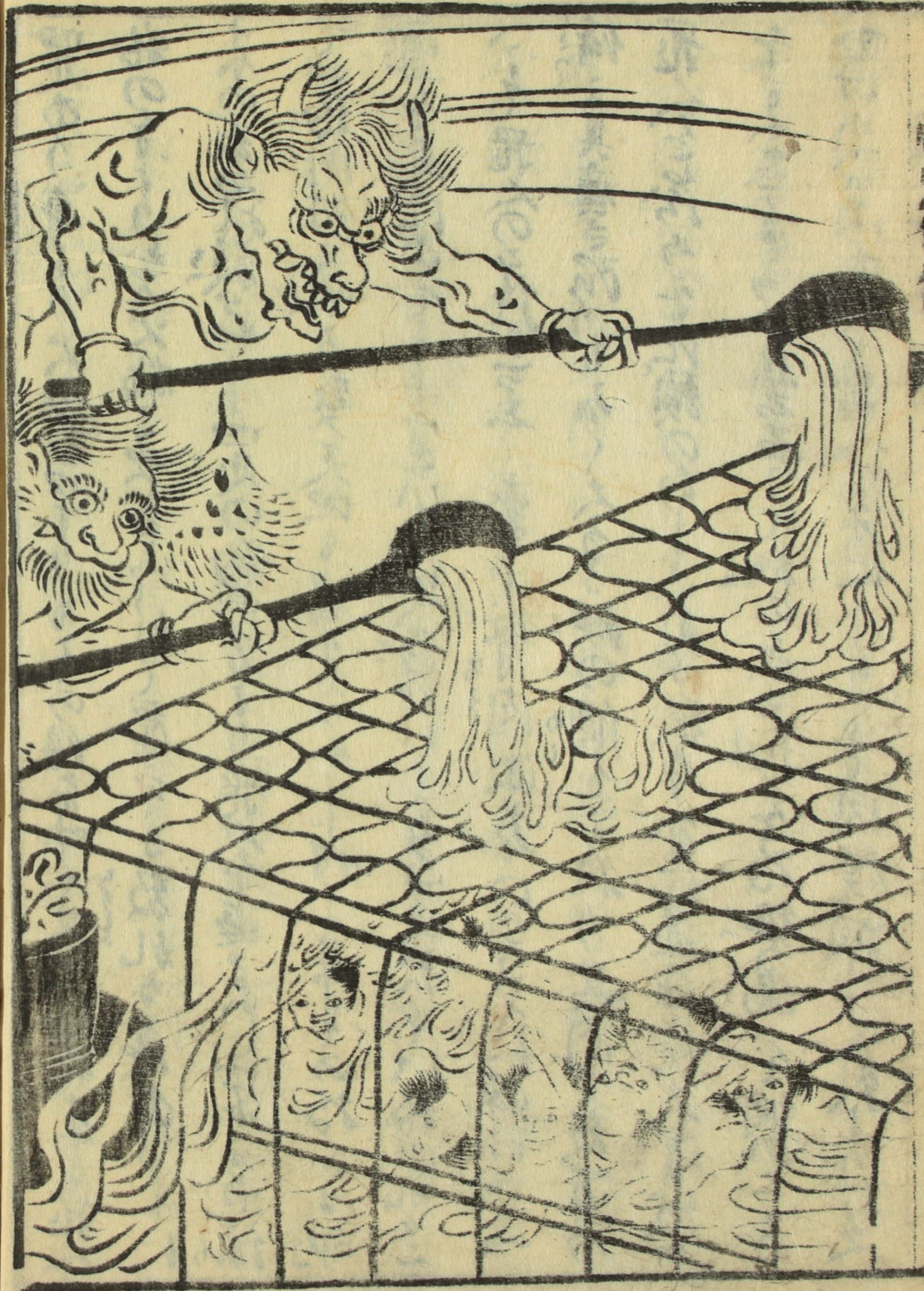
○又教生ある罪人ありとて七八寸の大釘おほいばねを挿し。かもし。まき
間まあり。まき。上うへに洗せんに。返かへて。踏ふみ抜く。走はしり。あり。又



魚はりきる者ありとて池中に罪人をひきり居る。小法の魚の
 やさしみ入る。煮るやきたるもあり。又鳥をくる者ありとて池
 の鳥を煮りて罪人の牙にさし居る。ついきせしものなり
 ○或はひきり此罪人を洗の柱に縛りつき獄卒定て踏釘
 板に舌を抜く。又又汁もぬけおぼきけい居るあり。えんハ我
 里のいもい存命あり何果とつる者ありき世者常々念佛をも
 誹謗する者ありとてげか名活地獄三人糞湯地獄に一人畜畜光
 に存せし者いんたのたのた其妻の目三人の死者七人畜畜一人
 慈悲の功徳とて病も快癒し今に存命にてあり外一人の老い友
 によりしむる言と直はよふる面をらん獄中にて獲れりえ

お下。おの肉に刺すを殊に腐入る膿汁をぬき此悪病の肉を
 大繋し胸をぬき。喉を大きく乾て水液飲り駭し或時ハ井の
 神といふか一度に大茶碗十六盞まで飲り事ありとて
 ○或は大方なる谷ありて方面二里ばかり有しとて地を
 寝石とて釘のおしく尖れや其上に投るの罪人或ハ胸筋をつき
 ぬかれ或ハ釘をよ身ををさ油をすくにさり刺されさけい居る不
 し。或ハ其色むれ執洋洞をぬれあふ事大波のよするをぬし
 罪人ハ洋洞と共に虚を小涌きあり。釘をさすりはれて骨
 ぐり獲られども叫ぶれしむ勢ハ狂も止せして糞し。又血池地獄
 あまし不にあり。皆女人を責をくや其救甚多し。或ハ



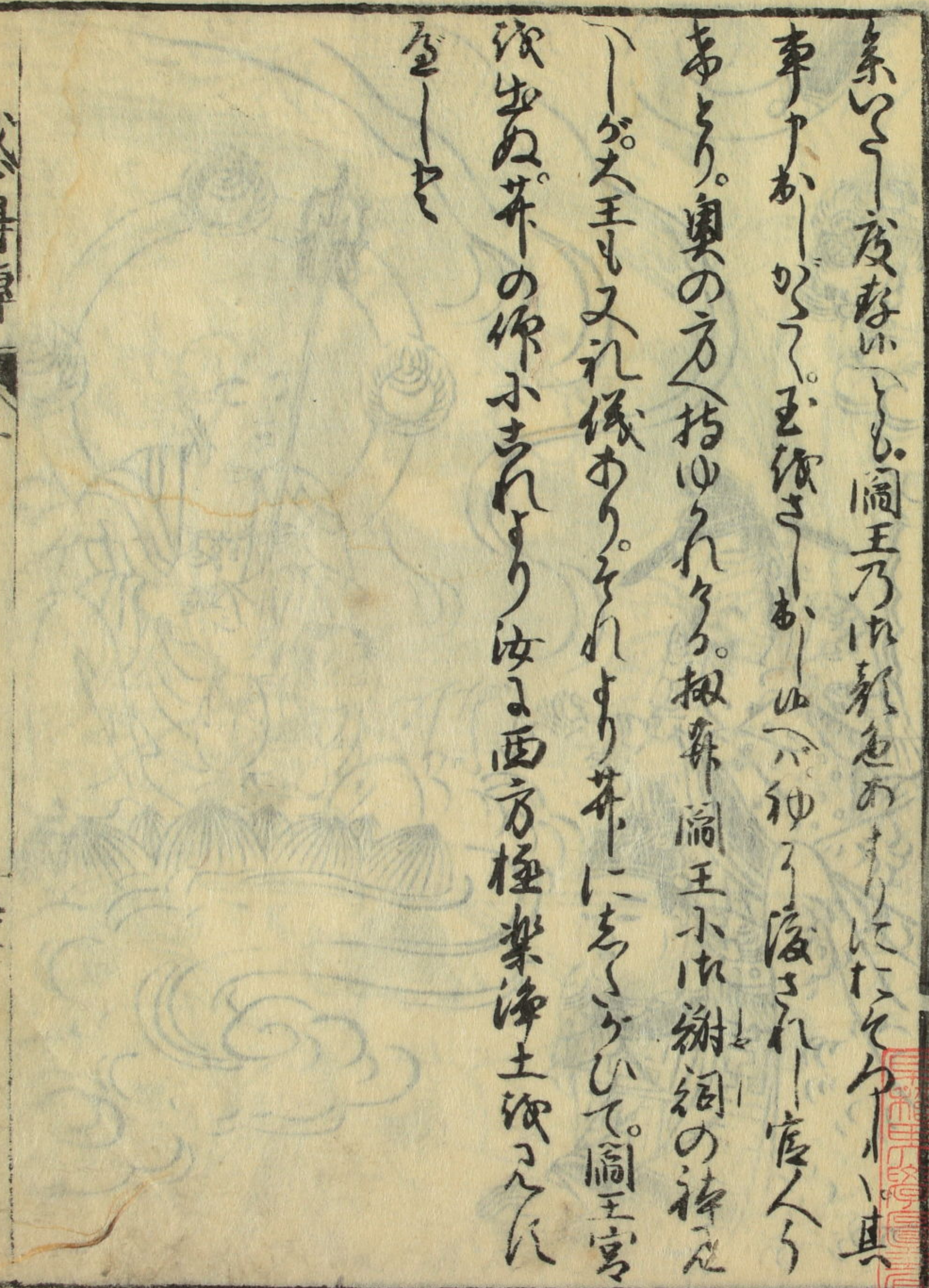


下にわけが罪人の泣きけはるに極く不吉なるはし今これを
云い出せば遍身汗をぬき身毛を穿てし極く并の極に
地獄に落ちる者いふより極く下なり

○然して地獄を経歴するに下界より下りしに
是以下極廣くして極大に光りにて是は若相も下
界極重く獄卒の身量も一倍の大きき人の上界の亦
見れば地獄の教甚おろしくなりともなより不吉にて速く
又悔の方もありて悉く後悔すべしといふ

○又此より并に去るに又又圖王宮の極く
印爾を返すも作られぬといふは沙婆婆れむげし持

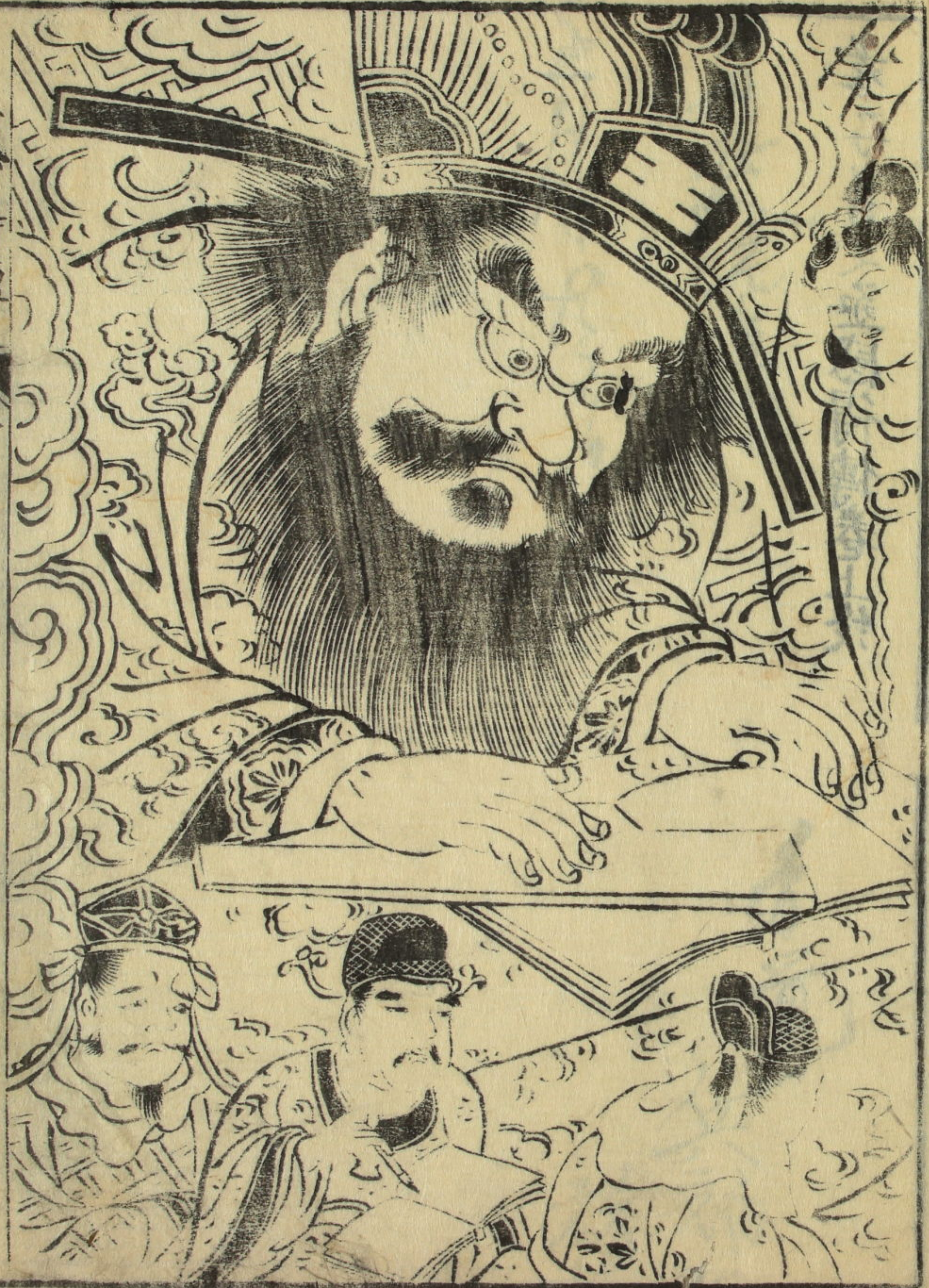
系いす一夜存いとも圖王乃は彩色ありにたそり其
事なりかゝりて玉衣さか山にゆる後されし官人
あり。奥の方指ゆれり。極く圖王小の謝絶の極に
下り大王も又礼儀あり。それより并に去るに。圖王宮
極く并の極小まれり。汝は西方極樂淨土に
至るべし



或尋專

上

下



孝子善之丞感得傳卷上終



己亥元年

五月廿九

承覽

兵部

校核

